

福島県川内村は、2011年3月13日から15日にかけて起きた東京電力福島第一原子力発電所事故により全村避難となりました。2011年、2012年、2014年と段階的な避難解除を経て、2016年に村内全域で制限区域が解除。

段階的な解除は、村民にさまざまな思いと判断をもたらしました。それぞれの選択を尊重しながら、なにもものにも代えがたいふるさと・川内への思いをあきらめずに、2011年当初から活動が続けてきた3人の方にお話しをお聞きしました。

いづれも、豊かな自然のなかで紡がれてきた川内のくらしを愛し、その価値を未来に残そうと模索してらっしゃる方です。そしてその根底に共通してあるのは、川内の「山のくらし」への感謝と敬慕でした。

戦中・戦後の只見川の電源開発の影響を抱えながら、川内と同じように「山のくらし」を大切にすることを選んだ奥会津。双子のよう「電源開発と山のくらし」という同じ歴史の刻印を持つ地域が、本調査においても交差しました。

県内事例調査

川内【その1】

小林めぐみ

震災の後、私たちが大事にしなきゃいけないと考えたのは「いのち」と「くらし」でした。「いのち」と「くらし」にどう向き合って、その大事さを伝えていくかにミュージアムとして取り組もうという話になった。「ライフミュージアムネットワーク」という名前をくださったのは港千尋さんです。今日も一緒にいただいています。天野さんには前身の「はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト」の時から一緒にいただいています。天野さんとは、いわきの復興公営住宅でのみなさんの場作り、七夕プロジェクトをやりました。

一昨年、ライフミュージアムネットワークを立ち上げて、昨年度は奥会津に話聞きに行きました。そこで今日トークイベントに来ていただいたお二人、板橋さんからは只見川の電源開発と生活工芸運動。榎本さんからは写真を用いてみなさんから記憶を集めていくプロジェクトのお話を聞きました。



【その1】

日時：2019年11月26日(火) 13:30~14:30
お話を聞いた場所：小松屋旅館
お話しをお聞きした人：井出茂氏(川内村商工会会長/小松屋主人)

【その2】

日時：2019年11月26日(火) 15:00~16:00
お話を聞いた場所：Cafe Amazon
お話しをお聞きした人：秋元洋子氏(川内村コミュニティ未来プロジェクト会長)
西山かね子氏(川内村コミュニティ未来プロジェクト副会長)

調査者：榎本千賀子氏(元金山町教育委員会職員/写真家/写真研究者)
天野和彦(一般社団法人ふくしま連携復興センター代表理事/
ライフミュージアムネットワーク実行委員会委員)
板橋淳也(三島町教育委員会生涯学習課長/ライフミュージアムネットワーク実行委員会委員)
小林めぐみ(福島県立博物館学芸員/ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局)
江川トヨ子(福島県立博物館学芸員/ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局)
塚本麻衣子(福島県立博物館学芸員/ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局)

そこで聞いたお話は今の福島にとって大事なお話だと思いました。過去に福島にどんなことがあり、どんな選択をして、その結果どうなっているのかを教えてください。これからは私たちがいろいろのことを考える大きなヒントをもらえませんか。今度は奥会津のツアーには井出さんに来ていただきました。今度は奥会津のお話を川内のみなさんに交換のようにさせていただく。今日はそんな場を作れればと思っています。

井出茂

ぱっと思いつかなかった。僕の名前を言ったのだと思います。

天野和彦
それしか思いつかなかった。

人の心が山から離れた

井出

会津の伝統的な食文化、乾物として山の恵みをしっかりと保存食として使っている部分、ものの方考え方は僕の基本



になつていて思っています。逆にうらやましいところもある。「川内村の郷土料理って何ですか」と言われて思い浮かぶのは、凍み餅、凍み大根、会津のどこにでもあるようなもの。いかんせん浜から車で30分もかからないで来てしまう。要するに伝統的な食文化が曖昧な形になってしまっている。唯一僕たちが誇れるものがあるとするならば「きのこ」だったので。お客さんがいらしたときに、山のきのこを冬場漬けて込んでおいたものを塩出しして鍋を作っておもてなができる。それが最大の僕の自信や誇りだった。でも、原発事故があって、そういうものを誇りと思えなくなってきた。人の心が山から離れたのが僕は非常に残念だと思っています。でも僕らは食べ続けています。食べても直ちに健康に影響がない、僕らもその部分だけは信じている。でないと、この文化を伝えることができない。だから、「いのちはなごはん」とかいろいろ作ります。家族にも食べさせるし「山から採ってきたものだけけど食べますか」と聞いて、「食べる」と言う人には差し上げて食べてもらっています。冷凍して送ってもいいです。販売じゃないです。川内から離れた人で、「食べたい」人には冷凍にして送ってあげる。そういうものがふるさとに戻ってこられる細い糸だと僕は思っている。

ふるさとなかったら帰って来らんねえべ

話がずれますけど、高齢のおじいちゃんが「浪江町に帰る」と言うので、「じいちゃん。なんで帰るの」と県職員が聞いた。「今さら帰ったってしょうがないべよ」って。じいちゃん「なんかあるべ。みんな都会に行つて、なんかあったときにどんなボロ屋でもふるさとなかったら帰って来らんねえべ。帰って来られる場所がふるさとだ。ボロ屋でもなんでもいいだ。そのために俺、帰るんだ」って言った。僕はこれが真実だと思っている。じいちゃん「スーパーがねえ」とか「病院がねえ」とか「切っちゃいけないの。全部自分が責任を取るから、そこで暮らしたって思った。これは忘れちゃいけないことだと思つて。でも、スーパー、病院そういうことに走るとどこでみんながいないか。今まで不便だったのにちょっと都会に出ると、「いや、おら、あんな不便なことさきたくねえ。川内村さ、信号2つしかねえだろ」なんて。それが戻つてこない理由の真実のようにな言われ方をしているのが、僕は心外。ちょっと話はそれ

実際横浜から何度か来ている小学校1年生のお子さんをお持ちの方は川内村に移住してきました。

天野 増えていますよね、そういう若い家族の移住者は。

井出 ひとり親世帯の支援もしっかりしています。

小林 奥会津と重なる部分があるなと思いつながらお聞きしていました。三島町も電源開発の後に何を大事にしたらいいのかを考えて生活工芸運動をされた。それも文化であり暮らし。他の奥会津のエリアも編み組をやっているけど、三島はそれをミッシェンとして町が掲げて共有してきたことによつて町の目標になった。川内のいいところ、アイデンティティをみんなで共有する、目指すところを作っていくのもいいのかなと思つた。板橋さんは今の井出さんのお話を聞きましてどうでしたか。三島と重なるところもありましたか。

自分たちの目で見て泉を掘つて

板橋 淳也
井出さんのお話を聞いて、全くそのとおり、ほとんど同じでした。現状的にも同じです。うちの町は原点に戻ろうと、町長も含め「もう一回みんなで泉を掘つてみれば何か思い出すことが出てくるんじゃないか」ということを常に振り返る。これからはAの時代になってくるかもしれないけど、あえて逆に自分たちの目で見て泉を掘つて、どういうふうに生きていくかを考えないといけないと思つている。

教育もやっぱり我々も同じで、三島町に住んでいて誇りを持つてる子どもたちを作つてあげようと「生懸命やっています。昔こんなことをやったな」ということが、高校生になって、高校になるとほとんど会津若松市に行きますから、大学に行つて都会に住んでも、「ふるさとつてやっぱりいいよね」「いろいろなことを経験したよね。あんなことを経験したよね」とそれを誇りに思つて自分のふるさとを見つめ、

年齢の捉え方、考え方を変えていかないと

井出 とても興味深い話を聞かせていただきました。これからは年齢の捉え方、考え方を変えていかないと、昔のように65、70になつたらもう年寄りという考え方をちょっと変えていかないとうまくない。もう一つ、アカデミー生が入つてきたという話をされましたよね。僕は東川町に研修に行つて、右肩上がりになっている自治体も見てきました。東川町の町長さんは川内村とは「地下水サミット」の深いご縁があります。天然地下水を使っている自治体が集まつて「地下水サミット」を毎年やっています。

天野 そうそう。川内の水のことはお話したほうがよろしいです。

井出 川内村は全戸井戸水です。上水道がない。保健所からは目をつげられて、叩かれています。

小林 それだけ水がきれいなのですね。

井出 いまだかつて地下水を使って食中毒を起こしたこともないし大腸菌が検出されたこともない。だけど保健所は目の敵にしています。川内村のことを。

天野 川内に水を汲みに来る人がいる。水汲むといつても、蛇口ひねるだけですけ。

井出 川内村の水は健康の源。おいしさの源でもあり健康の源でもある。前に原発事故で川内村を去るとしたら条件は何

どうやって大人になって還元していけるかを考えさせる。それをモットーに教育をやつてきている。井出さんが言っているようなことは山間地域の共通問題だと僕は思いました。

雪国の生活をどのように楽しんでいくか

ただ、気候が全然違う。我々にはどうしても雪があるの、雪の問題が出てくる。我々が生活工芸に力を入れたのは、雪国の生活をどのように楽しんでいくかが原点。ある老人が一言言つた。「俺は冬になると楽しみでしようがねえ。ものづくりでぎつから」。そこが原点、その一言が原点で今の生活工芸運動を展開しています。夏の間に材料を取つてきて、冬に「生懸命ものづくり、お茶飲みしながら作る。それが最近はこちらと有名になってきて、冬に作ったものが昔はお猪口一杯のお酒だったのが、最近「東山温泉で一泊できる」つていうことになりました。

うちは生活工芸アカデミーというのを29年からスタートして3年目です。1年間編み組の勉強をして住んでみませんかという取り組みです。1期生、2期生、3期生。1期生は4人受けて2人残りしました。去年の2期生は5人受けて3人残りしました。今3年目で4人が全国から来ています。10月時点では4人全員が残る気満々という感じ。

町にとつての起爆剤

ただ、唯一川内を見てうらやましいと思つたのは、ここは雪が降らなくて、誘致したら工場、企業がやっぱり来る。いわきにも近いし交通網も便利で誘致しやすい。奥会津はやっぱり雪があつて企業も来ない。1年間彼女たちは勉強してどうやって生活するのか、我々も考えているのですけれど、「自分たちが「私にここに住んでこういう生活をしていきたい」と。それが逆に我々住んでいる町にとつての起爆剤になり、「よし。じゃあ、もうこういうことをうちの町でもやつてみようか」つて、「彼女たちと一緒にこういう展開してみようか」という起爆剤になる。一つの財産でもある。

小林 外の人が入つてきてコミュニティを。

井出 水から放射性物質が出たら僕はもうここには住みません。それだけが判断基準です。

小林 水から出た時ですか。

井出 命も水ですから。さつきアカデミー生の話がされました。僕もそこが肝だと思つている。僕もそういう人たちに川内村で起業してもらいたい。工業団地はバツと人を集めるのには効果的ですけど、足腰の強い地域になるかというところ、そうはならない。他から来て店をやつていて責任がないから。ちよつとうまくなくなるとパツと撤退。だけど、しっかり地域に入ってカフエやいろいろな起業をする。僕はこれが地域の底力になる最高のエネルギーだと思います。商工会の会長をしていますので、起業と言われると「どんどんやれ」、「お金も金融公庫を紹介するから」と、いろいろな補助事業、もらっちゃえるお金、そういうのをどんどん紹介する。実は福塚という大阪から来た女性が川内村で花屋を開店させました。本来はなかなかお金が下りないけれども、鉛筆をなめなめして。

地域の底力になる最高のエネルギー

井出 命も水ですから。さつきアカデミー生の話がされました。僕もそこが肝だと思つている。僕もそういう人たちに川内村で起業してもらいたい。工業団地はバツと人を集めるのには効果的ですけど、足腰の強い地域になるかというところ、そうはならない。他から来て店をやつていて責任がないから。ちよつとうまくなくなるとパツと撤退。だけど、しっかり地域に入ってカフエやいろいろな起業をする。僕はこれが地域の底力になる最高のエネルギーだと思います。商工会の会長をしていますので、起業と言われると「どんどんやれ」、「お金も金融公庫を紹介するから」と、いろいろな補助事業、もらっちゃえるお金、そういうのをどんどん紹介する。実は福塚という大阪から来た女性が川内村で花屋を開店させました。本来はなかなかお金が下りないけれども、鉛筆をなめなめして。

天野 鉛中毒になつちまう。なめすぎちゃつて。

井出 大阪の27歳の福塚は、今までで一番素晴らしい事業計画を書いてきた。一人で作つた。大したもののでびっくりした。移動販売なの。

井出

板橋

彼女たちアカデミー生は、中心部から8kmの山の集落の空き家を町が譲り受けて、中をリフォームしたシェアハウスに住んでいます。その集落はもろろん子どもは誰もいません。若い人は50代の人。他は70、80代の家族が23世帯。彼女たちが来るまでは「なんにもいいから」つて。町の人が行つても、「うちは何も関わりたくないから」つて。「いいだつて。このままの生活で」つて。ところが、彼女たち4人が移り住んで来て、今はいろいろなことをやっています。桜の木植えて、先週は「桜の木をみんなで地区に植えたから、町長さん、ぜひ来てください」つて。「桜の植樹祭をやるから」ということで、地区の人みんなが集まつた。町で町民運動会を年に1回やっていますが、その地区の人はほとんど全員来ます。

小林 すごいですね、4人の威力が。

板橋 4人の力でこれだけ地域は変わる。

天野 集落の人が「なんにもやらねえ」つて言い張つたのはどういう意味だつたのかな。せわしないから？

板橋 もつこのままの生活でいい、余計なことはしたくない。

天野 めんどくさいことになる。

あの4人でこれだけ

板橋 そうそう。めんどくせえから。例えば、「これをやりたい」と町で提案すると、「ここにする」「土地の問題だつてあんへ」「あの家の説得を誰がやるんだ」「役場と連絡取るのは誰がやるんだ」という話になるわけです。みんな年取つて

川内のYO-TASHIというところや植業に店を出す。行政のいろいろなセレモニーで彼女に全部花を頼む。要するに、地域で食つていけるとはどういうことかという地域の人が使つてあげなくちゃだめ。例えば、江川さんが川内村でブックカフエをやる。「じゃあ、あそこ、使おうよ」つて、みんなで行って使つてあげる。

江川 それだけの地域力があるのですね。

60代、70代は主役

板橋 井出さんがさつき言つていたように60代、70代の人たちが生き方を変えなきゃならない、実はそこがポイント。僕は「60代、70代は主役」と言っています。なぜ主役かと言つて経験もしてきているし、「生懸命働いて線退いた方々ですけど、実は知恵とパワーと能力は人一倍持っている。なぜ主役かというところ、これから若い人たちがこの町に移り住んでどうしていかなきゃいけないか、その一つのポイントとして60代、70代の人たちのパワーが必要ですよ。

井出 そういう人たちは人を寄せ付ける魅力がある。昔話もしてくる。いろいろなこともわかつている。子育て世代の女性におばあちゃんが「そんなんでお悩むことねえんだよ」つて一言言つてあげられる。

小林 心が軽くなりますよね。

井出 そう、軽くなる。そういうことなの。そういうところで教えてもらつて、若い人たちがさらに起業していける状況になつてくると、地域はもう一度V字回復する。V字回復しないのは「今頃あんなことやってよ」つて、絶対言つての考え方なの。70ぐらいの人が店をやると、「見ろ、あれ。今頃よ。金かけて借金してよ」つて、で、失敗することを望むわけ。「ほれ、やっぱり失敗した」つて。

小林
やっかみですね。

井出
「みんな、おじやの店行くべよ」と言っ盛り上げてあげればいい。地域ってめんどうくさいところがある。一生懸命やっている人をやっかむし、ねたみ、そねみで引きずり降ろそうとする。

小林
全部「み」がつく。

板橋
やっかみですね。どこも同じ。そういう考えを持つ。それを変えていくためには誰がポイントなのか。60、70代の人たちに「いや、こういう時代だから」と僕たちが一生懸命しゃべったって、多分聞く耳を持たない。

井出
一番は70代の人に稼がせること。

板橋
そう、それです。

井出
金が入ったら、いきなりスイッチが入る。

小林
儲けてもらう。

高齢者に稼がせる

井出
川内のマラソン大会で老人クラブに儲けてもらおうと思っ
ています。要するに稼げる高齢者をどうやって作るか。稼
いだら孫にお小遣いをあげられる。もらったら、孫が「じい
ちゃん、すごいね」と言う。これがコミュニケーション
になる。必要以上のお金はいらないけど、ある程度のお金

天野
歌って踊れてものまねもできる社会教育主事。

板橋
関心を持つじゃないですか。かっこいいと思うじゃないで
すか。そういうのが大事。何事も仕事でもなんでも、楽し
もうよ。どうせやるなら楽しもう。楽しむことが絶対
大事で、それをどうやって人にうまく伝えるのが、これ
からの時代には大事でしょうね。アカ「ミ」生も本当に1
期生は大変でした。鬱になりかけるくらい。でも、残った
子たちがまたいろいろ考えて、2期生に伝えて、2期生の
人たちがまた3期生に伝える。10月になってくると必ずス
トレス的なものが出てくるけど、全くない状態。

天野
山ぶどうに触ってねえか、その人たち。多分それが薬にな
っている。

板橋
今はマタタビより本気。そういう人と人とのつながり方を
どうしていくかっていうことじゃないかなと思います。

井出
そうやって伝統を守るって実は一番かっこいい。かっこいい
し、ある程度の年齢になったときに、こんな大切な仕事に
就けるって誰もができるわけじゃないので、素晴らしいです。

板橋
そういうことを教えたい。でも、今の若い子たち、地元に残
っている例えば役場職員の若い子たちに伝統工芸と言っ
ても、普段からそういうのに携わって、見ているのでピンと来
ない。では、それをどういふふうに伝えるか。町外から来
た人たちが好きで「こども」のづくりをやっている姿を見
て、地元の人たちも関心を持ってくれるようになる。

江川
刺激になりますよね。

サツパカマ

を稼がせるのが大切。川内優勝選手がこの前コラムに書い
ていました。「マラソンを完走すると完走証をもらえる。

みんな持って歩いたり、何か食っている間にぐちゃぐちゃに
なったり汚れたりする。ところが、1回300円でラミネ
ート加工してくれるサービスがある」と書いていた。これ
はいたただきたなど。要するに、ラミネートの機械を4台か
5台用意しておく。300円ずつもらってスーツとやるだ
け。そしたら、老人会の活動資金になる。どこかに行っ
ても食べる。社協に世話にならなくて、胸張って金を使え
るわけだから。高齢者に稼がせる。力が入ります。痛い
腰も痛くなくなる。

天野
生きがいですから。

小林
自分が使うお金を自分で稼ぐのは大事ですよ。

板橋
うちの生活工芸、ものづくりをやっている人の主役は70
代、80代。ぱりぱりやっている人たちが普段は「膝、痛え」
って言っている。「膝痛え」「俺、だめだ」なんて言ってい
ながら、山ぶどうを採る時期には、ザーツと行くのです。
若い人を置いていく。

江川
普通の山道じゃない。ほぼ崖ですよ。

それが生きがいなのです

板橋
崖です。普段は「膝痛い」と言っている。それが山ぶどう
の材料採りの季節には本気。それが生きがいなのです。

小林
もちろんお金もあると思うけど、作っている姿を子どもさ
んお孫さんに見せられるのも大きい気がする。

井出

板橋
刺激になる。サツパガマって知っていますか。

小林
最近、流行っていますよね。

板橋
サツパガマ。農家ではあちゃんたちが畑仕事に行くとき
サツパガマはく。今、地元の若い子たちがサツパガマはい
ている。普段の町中で。

小林
すくく動きやすい。「猿袴」と書く。

井出
こつちで言つ「もんぺ」。

小林
太ももがすくくゆったり、足首がキュツとしている。昔の
ものは脇が開いています。着物の上に着ていたから。

天野
ジョッパーズだな。今でいうところのジョッパーズ。

板橋
町外から来て移り住んでいる子たちがはいていたら、地元
の役場職員の子も。

天野
かっこいいよね。

新しい風

板橋
「かっこいいでしょう」とか言いながら仕事している。こ
れも新しい風が入ってきて刺激になるということなのか
な。面白いと思う、そういうことを大事に待つ取り組

仕事している姿をね。

板橋
最近長老だった人が亡くなられた。90歳までやって。お葬
式で、お孫さんたちはじいちゃんを作ったものを分かって
いた。一生懸命作っている写真をみんなで作っていた。そ
ういう気持ちになる、それが伝統につながってくるのかな。
息子さんは全然やらなかったけど、じいちゃんが亡くなっ
たら材料採りから始めた。

小林
本当ですか、すごい。跡継ぎが。

板橋
「おやじがやってっから」とか言ってやらなかったのに、「俺
も作ってみた」って。

榎本
そういう姿があると、やる気持ちが出てくる。それが代々
ふるさとして育った人たちのなかなと思います。

「楽しめよ」と言っています

板橋
それはものづくりの二つの例。地域づくり、村づくりでは必
ずそういうのを見てきている。井出さんも若かりし頃、先
輩が「すごい動きをやっているな」というのを見てきている
し、我々も同じで、上の先輩が「こつちのこと、よくやって
きたよね」とか思うじゃないですか。どういふふうにそれ
を伝えていくかがすくく大事。

見ている側は、かっこいいと思うのか、面白そうだと思っ
たのか、どこか必ず心の中に残るから、「よし。じゃあ、俺た
ちもやろう」となるわけです。だから、僕はまちづくり、地
域づくり、ものづくり、何でもそうですけど、「楽しめよ」
と言っています。それはここにいる天野さんと一緒に社会
教育をやって学んだ。天野先生のキャッチフレーズは「歌っ
て踊れる社会教育主事」ですから。ものまねもできますよ
ね。

みが大事。

小林
山に入って編み組細工の材料を採ると川内できのこを採
るのって同じですよ。

板橋
金山だって三島だって、やっぱり秋はきのこ、春は山菜。

小林
イワナも素晴らしいですよ。水がきれいだから。

江川
水とイワナはセットです。

板橋
きのこで生活している人がいたわけだから。それがい
最近まで出荷停止。やっぱり我々はきのこ買います。食べ
ています。だって、その季節になったらきのこ食べたくなる。

天野
本州では川内にしか生えないきのこがある。北海道の一部
と川内にしか生えない。川内はそういう植生。

井出
天野先生が言われたのは、「キツネノセンボンサカズキ」。

小林
すごい名前ですね。

井出
盃のようなものが千本。千本というのはたくさんという意
味。それがサン「礁」のようにピンクのきのこが塊になっ
てる。食べられない。食べられないけど北海道と本州では
川内村だけ。北海道は北大の演習林の中にあつて、高速道
路がその演習林を通る予定だったので曲がって通した。

小林
そこを守るために。

井出
川内村は開発しちゃった。

天野
おんつあだな。

井出
おんつあが。でも、そこだけじゃなくて僕の家の裏山も同じ山なので菌糸で囲まれている。菌糸で覆われているので他にも出る場所がある。発生場所としては日本一のきのこがある。「ノウボウフデ」という。

天野
それ、日本一なの。

井出
発生場所としては日本一の広さ。面積、生える広さが。

井出
食べられないけど、天野さんが言ったように川内村はイワナが取れる。一度、遠火で焼いてベンケイに挿す。焼干しと言う。焼干しにして、それで出汁を取る。その他に晩秋になるとムラサキシメジが出る。それも一度囲炉裏で焼いて干す。それで、イワナときので出汁を取る。川内村の伝統的なやり方。

天野
正月の雑煮の出汁はイワナでは取らないの。

イワナときので

井出
今は取らないけれど、天野さんが言ったように川内村はイワナが取れる。一度、遠火で焼いてベンケイに挿す。焼干しと言う。焼干しにして、それで出汁を取る。その他に晩秋になるとムラサキシメジが出る。それも一度囲炉裏で焼いて干す。それで、イワナときので出汁を取る。川内村の伝統的なやり方。

天野
あれは川内村のオリジナルというか郷土料理の一つで間違いないと思うし、福島県の中では同じ手法でやっているの

は檜枝岐。檜枝岐と川内だけイワナで雑煮の出汁を取っている。

井出
今はやめてしまった。震災のときにやめてしまいましたけど、イワナから取った出汁の手打ちうどんをいわなの郷で提供していたことがある。「こぼろ」とイワナと乾燥しいたけ、川内村のしいたけを乾燥させてそれで出汁を取って、うどんを提供していました。

小林
豊かな味ですね。

板橋
どちらかと言うと南会津。伊南村とかそこら辺はやっていきます。只見まで来ると、出汁は取らないけど、イワナをお雑煮の上にドカーンと載せていたりする。

天野
川内でふるさと学校をやっているんですけど、第1回目のテーマがイワナだった。なんでイワナだったのか、川魚で他にもヤマメだってハヤだってフナだっていっぱい。したら、なんでイワナだったのかなと思って、子どもと一緒に学ぶ時間を作って、淡水魚の専門家も呼んでいろいろやってたら、やっぱりイワナじゃなきゃだめだった。結論から言うと地球温暖化と関係があって、檜枝岐とか伊南もそう、イワナは水温が低いところじゃないと生きていけない。その頃はイワナしか住めなかつたんだ。

井出
イワナとウグイ。

天野
そうそう、だからイワナだった。必然だったんです。特別に「イワナでどれ、村おこしやつか」とか、そんな話じゃない。それが貴重なタンパク源だったし、そこにいたから。

江川
もともとあったものですね。

天野
ソーシャル・キャピタルの話、すごく自然な、もつともな理由があった。

引き戻し運動

井出
地租改正の時に明治政府が間違っって村の山林を国有林にしてしまった。川内村は代々藩から自由に山に入って薪木を採っても、きのこを採ってもいいよと許されてきた。ところが、地租改正で「国の土地です」と言われ、一歩も入るな、きのこも採るな、薪も採っちゃいかなというところで暮らしがピンチになった。そこで歴代の村長がこれは引き戻し運動をしなくちゃいけないと今で言う行政訴訟を起こす。行政訴訟を起こして最終的には勝訴する。全面勝訴したのは川内村ともう一件ぐらいしかない。

天野
そこなんです。この話はやっぱりしてもらわないと。

井出
今の川内村があるのは先人たちのそういう村に対する熱い思いと戦いがあったから。

天野
そうなんだ。そこを抜きにしてはやっぱり村は語れない。一時期こは住民税ゼロだったのですから。

井出
木炭生産量が日本一ですごく潤っていた。阿武隈民芸館の入り口に碑があるでしょう。あれはイノベーションを起こした井出さんという県の職員に対するお弟子さんたちの「ありがとう」の意味。井出さんは県職員のとときに炭焼のイノベーションを起こした。良質な炭を飛躍的に生産できる技術開発をした。

天野
リスベクトだね。本当に。

井出
大平というところに炭焼職人の開拓部落がある。黙っていても炭焼き日本一にはなれない。技術者が必要。当時、炭焼き職人は日本全国をノマドのように渡り歩いていた。資源のある場所で炭を焼いて、また別の場所に動く。川内村に来て広大な資源に出会った。日本一になれたのは資源があった、もう一つは技術開発ができた、そして職人がいたからです。

天野
さかのぼると山林引き戻し運動につながってくる。

井出
そこにつながってくる。そういうことがあって川内村は原木しいたけの栽培も盛んだった。炭焼きが下火になったときに天野先生も存じの小林さんという方が原木しいたけをやっていた。あの人が言うには40組ぐらいの家族、40組だから80人プラス子どもを入れると3倍ぐらいの人間を養える資源が川内村にはあったという話をしていました。

板橋
原木しいたけは何年頃ですか。戦前ですか。

井出
戦前戦後です。原木しいたけが山に多かったのは、昭和の代も原木しいたけを盛んにやっていた。子どもたちの仕事は一輪車に原木を積んで山の中を歩くこと。これが実は自閉症の最大の訓練。

小林
川内のことがわかってきました。

江川
すごいですね。山は切り離せないということを村長はちゃんとわかっていらつしやった。





小林めぐみ

県立博物館で昨年度からライフミュージアムネットワークという事業を立ち上げました。震災で命を失った方もいらつしやるし、暮らしを失った方もいて、取り戻そうとしている方もいらつしやる。「いのち」と「くらし」を大切にしていけるかどうかを考えていこうとしたときに、地域にあるミュージアムは土地の記憶を残していく場所でもあるので、そのネットワークで「いのち」と「くらし」を考える事業をしていったらいいんじゃないかと。

お二人をご紹介くださった天野さんに実行委員会に入っていただいて、一緒にやっています。何が福島で起きてきたのか歴史を学ぶことが、今私たちが考えなきゃいけないことの役に立つんじゃないかと思っています。去年いろんなところでお話を聞く中で、奥会津で只見川の電源開発がもたらしたことで、その後の奥会津の選択についてお話を聞いたんです。会津の、数十年前ですけども、近い過去で起きたことに私たちへのヒントであるなと思っています。震災と事故の後に福島が何を大事にしていっていいのかということに繋がるかなと、そのことを一緒に考える場所を作りたいなと思いました。

川内村に今年の春にお邪魔したときに、帰村後、山の暮らしを大切に、もう一度足元を見直しているというお話をお聞きして、奥会津と川内はすごく相似性があるなと思ったんです。それで、奥会津の歴史と川内の今を重ねることで、お互いにいろんなことが考えられたらいいなと思いました。先日、奥会津でツアーをさせていただいて、三島町や金山町の小さなミュージアムをめぐりながらその土地のことを教えてもらいました。同時に、天野さんに教えていただいて川内村から井出寿一さんに来ていただいて、川内の震災以降のことをお話ししていただきました。それに続いて、今回川内に板橋さん、榎本さんのお一人に来ていただいて、奥会津のことを川内の皆さんに聞いていただいて、これからどういうことを大切にしていっていかを一緒に話したいと思っています。そのトークに先立って、川内の今のことをお聞きして、それからトークに臨みたいなと思っています。

天野さんにご相談して、秋元さんのお名前を覚えていただいて、お時間をいただきました。どうもありがとうございます。お二人とも、西山さんも一緒にやっていらつしやる「川ニテイ」、川内村コミュニティ未来プロジェクトなんですね。

川ニテイ

西山かね子
そうです、一緒です。

天野和彦
会長、副会長。

小林
会長、副会長。ありがとうございます。揃い踏みで来てくださって。

天野
普段はなかなか私も口をきくことができないぐらい、なんことは全くありませんけど。アットホームな感じでしょうか。

秋元洋子
その川ニテイの関係の資料を、こんなことをやったよというのを取ってきたんです。6部しかないんですけど。

川内へ迎える会

西山
その表紙のは川ニテイじゃなくて、「川内へ迎える会」で。震災後すぐから、居場所づくりとして。

秋元
サロンというか。そういうのを。

小林
帰村の年ですか。

動して。

西山
迎える会は帰村後に一応解散したんです。それで、新たに婦人会として新しい会長さんになられて、新メンバーで活動を始めたんです。

小林
いつ頃解散なさったんですか。

秋元
迎える会は、3月17日に川内村主催の「がんばっぺ川内」っていう催し物があって、4月からは使っていた温泉のそばの「あれこれ市場」も返さなきゃならないということで。それでもう解散しよう。

小林
そうすると、完全な帰村が2016年で、役場が戻ってくるまでの。

秋元
1年間でした。

小林
一部帰村となって帰れる人もいたけれども、役場は戻ってこないという時期って一番不安定ですよ。

高齢者ですよね、戻ってきたのは

秋元
そうです。平成29年、2017年の3月に借り上げ住宅、仮設住宅の期間がなくなったということで。本来に高齢者ですよね、戻ってきたのは。若い人は子どもが6年、7年と同じ学校の友だちと離れるのは嫌だとか、そういうことで帰ってこれない。あとは、雇用。避難先で就職しちゃった人たちは戻ってきてても大変だということ。戻ってくるのはやっぱり高齢者。

小林

秋元
そうです。

小林
そうですよね。2016年。村に帰られた年。

西山
川ニテイは天野先生がいらして、それから一緒に始まった。これは震災後早々、帰ってきてすぐからの活動なんです。

天山祭り

秋元
それは天山祭り。

小林
天山祭り。今日の午前中に聞きましたね。天山祭りの話。天山文庫の志賀風夏さんに教えてもらった。

西山
天山祭りもその頃はまだ行政が戻ってなかったの…。帰っている人だけで、行政抜きでやっていったんです。

江川
それはすごいですよね。

小林
志賀さんが「祭りはやっちゃだめって国から言われたので、祭りじゃありませんと言っちゃりました」って。「だけど、当日になったら天山祭り」。こうやって皆さんでおそろいになって、当時も今も毎年天山祭りをやっていらつしやる。

原発事故によるにもかかわらず詩を尊ぶ精神を貫くことができました

秋元
そうです。震災のときも村がない状況でやったということで、その結果、平成27年の11月23日だったかな、藤村記念歴程賞というのを村民がもらって東京に村長と一緒に

今何割ぐらいですか、戻ってきたのは。

秋元
8割は戻ってきました。

小林
じゃあ大分。

秋元
戻ってはきた。来ないのは若い人子どもたち。

西山
子どもは5割、6割ぐらい。帰村のとき最初は14名でした、小学生。今は保育園に小学校、中学校で96名かな。

江川
以前は大体どのくらいいらつしやった？

西山
120名ぐらいはいた。小中学生。

江川
小中学校で大体120だったのが、最初は14名戻ってきた。

西山
ごめんなさい。今は101名でした。保育園が36、小学校が39、中学校が26で、101名になっています。

江川
ほぼ戻った。8割。

西山
それに震災後ひとり親世帯への支援を強化して、子どもをなんとか呼び寄せようという村の力も入って、そういう人たちも結構来ています。

秋元
移住者です。

秋元
そうです。事故の時は川内へ迎える会のメンバーでやったんですけれども。婦人会の有志というような形だね。

西山
そうね。

小林
山菜はやっぱ大事な素材。

秋元
山菜はやっぱそうだ。わらび、ふぎ。

西山
天山のお弁当に欠かせない。山菜を必ず。

秋元
でも、最近になってやっぱり放射能ということで難しくなってきた。だから、今度は会津から、西会津から採るようなことを言っていました。今日、今の婦人会長さんにも来てもらおうと思ったら、用事があって今日は来れないっていうことで。そういうことも聞けるから一緒に話をしたらどうかなと思って言っただけです。

小林
婦人会の皆さんは、2014年直後から活動をしていらつしやった。

秋元
そうです。帰村になったときには村が戻ったということ、それぞれが「川内へ迎える会」から自分の部署に戻って活

小林 移住の方はひとり親世帯に力を入れたということで、ひとり親の方が多いんですか。

西山 保育料無料とか、すべてそういう援助。移住して来た人が新しい家を作るときには村から、3、000万に対して300万の援助。

秋元 最初はそういうものに力を入れて、そのうちだんだん商業とか産業とかに力が入ってきました。まず人数を増やしつつあるので頭がいっぱいでしたよね、最初は。

西山 雇用はなかなか。野菜工場も最初に出来ただけで、なかなか人が集まらなくて、随分苦労したようです。最初は、川内の人たちを雇用するというのだったんだけど、足りなくて、いろんなところから来ているのかな。

秋元 川内に入ってくる業者は最初はまず川内村の人たちに声をかけてと考えるんですけど、賃金の問題とかそういうので辞めたり。いろんなことから人数が減っちゃって、よそから募集という形になりますね。

江川 婦人会はどうですか。迎える会が終わった後、メンバーを新たにしてくれる婦人会の活動の状況というのは。

秋元 もう疲れるほど。

西山 いっぱいやりました。行政には他に支援してくれるグループがないの。だから、イベントがあるとすべて婦人会が主に。

江川

てきたの。6月上旬に。

「なんで帰ってきたんですか」

天野 それはなんで帰ってきたんですか。「なんで帰ってきたんですか」っていう言い方はないけど。

西山 おばあちゃんがもうそういうところにいけないんです。皆さんに迷惑をかけるし。それで帰ってきたとき、声かけてもらって。「一緒に居場所づくりをやりましょう」って。それで、迎える会が始まったんです。うれしかったです。

江川 居場所づくりっていうのはどこからの動きだったんですか。

秋元 どこからもないです。

なんとかしなきゃなんねえな

秋元 とにかく川内村はこのままではなくなってしまうと。なんとかしなきゃなんねえなと、1ヶ月考えました。立ち上げるまで。1ヶ月、毎日、毎日。

天野 うんとかう嫌な言い方をすると、会長は帰ってこなかったよかったです。役場は退職してたし。

秋元 いや。実際そうなんだけど。

天野 ねえ。どこさ行ったっていいわけだ。言ってみたら。

行政のほうから「こういうのをやってみてもらえないか」というふうには？

西山 そういう声もあるんだけど、私たち自主的に「じゃあ、お手伝いしますよ」ということで。

秋元 結局、復興祭が3年間続いたんです。婦人会で豚汁を作ったり手伝いをしながら1年間の行事をやるんですけど、いや、もう大変だったです。村、商工会、すべての行事に婦人会が入って。

西山 商工会の女性部ってあったんですけど、皆さんもう高齢になっっているんです。それであんまり活動ができなくて、代わって婦人会がいろんな支援をしてきました。

天野 会長もかね子さんも3・11のときはどこさだったの？避難した後は。

秋元 3・11のときはだから、3月16日までは富岡の人たちへの炊き出しでしょう。あと、郡山のビックパレットで少し。

天野 ビックパレットにちよこつといたの？

秋元 いました。まだ役場職員だったから。ビックパレットで炊き出し。

天野 かね子さんはどこさいたの？

「もうつとも」

西山

秋元 そう、実際は。でも、自営業もやっていたものだから、4月の下旬からまた仕事が始まるよということ。うちにも90何歳っておばあちゃんがいたし、じゃあ、もう戻らなきゃならないということに戻ってから、1ヶ月間毎日毎日どうしたらいいのかわかって。

天野 会長にも副会長にも、同じような質問だけど。「ばあちゃんがいたから」っていうお話しだったけど、「本人とすればどうだったんですか？

西山 自分の気持ちとして？

天野 うん。

西山 私は帰りがかったんです。自分も民生委員で高齢者のことを考える立場だったのに、そこは考えないで自分だけのことを考えて避難しちゃったんです。後から連絡を取ったら、もうみんなバラバラでしょう。「近所のあの人はどこに行つたのかな」とかいろいろ考えたりもして、とにかく早く帰ってそういう把握ですか、そんなのもしなくちゃなるまいな、なんていうのもあって。

天野 村の中で請け負っていた自分の仕事の責任があって、そこをなんとかしなくちゃならないんじゃないかっていう。

西山 最初はそこまではまだ考えなかったんだけど、徐々に考えるようになって。三重県に行って少し生活して落ち着いて、そんなことも考えるようになって。

天野 帰らなんねえっていうふうにかね子さんも思ってたらしい。

私は震災のときは自宅にいたんだけど、やっぱり婦人会で皆さんと炊き出しやったりして。私孫がまだ3歳と4歳と小さかったから、娘が「もうつとも」。

天野 「いてらんねえ」って言って。

西山 うん。「ここではちよつと心配」って言って。できるだけ遠いところに行って言って、三重県まで。

天野 三重県まで行ったの？何のつながりもなく？

西山 娘の主人の兄弟が三重県にいたの。そのつながりでガソリンをちよこ入れながら高速道路を2日かかりで行きました。行ったらすぐ大病院に連れて行かれて「検査してください」って。

天野 ホールボディカウンター。

西山 家族全員で検査させられて。向こうもすこい。

江川 それは3月何日ぐらいでした？

西山 16日。福島に私4日間いたんです。避難所、ビックパレットとかがもういっぱい入れなかったの。それで、福島市のホテルに、穴原温泉のホテルに4日ぐらいいたんだけど、水が出なくて。「もう無理だよ」と言われて、じゃあ仕方ないからと、兄弟を頼って三重県まで行って。娘たちは子どもが小さかったから。私には90歳以上のおばあちゃんがいる、なかなかいれないです、遠いところには。水戸にもう1人娘がいたから、そこに一度帰ってきて、水戸から川内に何回か来て、帰れるかどうか様子を見ながら。その後帰っ

西山 帰りたかったです。

天野 それはなんで帰りたかったんだべ、じゃあ。

川内が忘れられなかった

西山 そこですね。やっぱり川内が忘れられなかったです。だっていつまでもよその土地にいけないじゃないですか。

秋元 放射能もそんなはないということも。

天野 洋子先生、なんで帰りたいと思ったんですか？もちろん会社のこともあった。

秋元 会社のことがまず。働く人も帰ってきているから。

天野 ばあちゃんもいた。

秋元 もちろんばあちゃんも。

天野 本人そのものはどうだった？そういうのがなければ戻ってこねくてもよかったです。

秋元 うん。それなかったら、もうちよつと避難先にいたかなって、そう思う。

天野 川内に戻らないっていう選択もしたかもしれない。もしか

すると。

秋元
それはしなかったと思う。

天野
なるほど。それはなんでだべ。

そういう流れになっっているんだね

秋元
そういう流れになっっているんだね、やっぱり。

西山
避難先にいたって周りに知っている人が誰もいないじゃないですか。ここはみんな周りが友だちだし。だから、ここに来て本当にほっとしました。

秋元
でも、当時はうちの犬と猫が群がって食べ物を探して歩いていた状態で、人っ子一人、いるのは本当に年寄りの人たち何名かぐらいだった。

西山
あとは猪です。猪。

江川
本当に早い時期に戻られたんですね。2011年の4月にはもう戻っていらっしやう。

天野
4月って、立ち入り制限されてなかったっけ。

秋元
いや。この辺は大丈夫だった。

小林
川内は全部じゃなかったんですね。

絆ってどういうことなんだ

秋元
9月に川内で植樹祭をやったんです、「いのちの森づくり」って植樹祭。役場のグラウンドの裏の高山の公園でやったんですが、そのときに仙台の荒浜のお坊さんはじめ、数名の方が来てくれました。このとき私は「絆ってどういうことなんだ」と思った。「ああ、来てくれたのか」「いや、来ました」と行ったり来たり。茨城のほうにも行ったりして「ああ、絆ってこういうことなんだ」って。本当に初めて「宝だな」って。

天野
この辺の話をお二人から聞くのは初めてです。

西山
いつも川内二ティの話が中心だったから。

江川
自分たちも大変なのに仙台に目を向けたり、茨城に目を向けるっていうのはすごい。

西山
津波で亡くなる方も多かったし。川内は原発だけだったから、家もそのままあるし、自分らも戻れたっていうので。

天野
いやあ。頭が下がる。

西山
いやいや。

小林
秋元さん、さっきおっしゃった「このままじゃあ川内村がなくなってしまう」というのは、帰ってきてしばらくすると、弱まっていたり小っちゃくなったりはしたんですね。そういう心配は。

天野
下川内と上川内とわかちつかから。下か。

西山
下か。あのトンネルからあつち側が。

天野
が、だめだった。帰還困難区域。

川内村はなくなっちゃうな

秋元
だから「ああ、これではもうだめだな。川内村はなくなっちゃうな」ってほんとに思ったからね。ビックパレットで世話してたときの頭から離れないの。「なんとかしなきゃみんな頑張らなきゃ」って思ってた。商工会長さんが「あれこれ市場を貸すから」ということで、そこを拠点として「絆の広場ひまわり」というのをやった。あの当時みんな前向きに進もうという感じでひまわりを使ってた。看板を作ってた。1人ではやっぱり怖いわけだ。どんな人が入っているか。だから、2名ずつ当番を作ってた。まじゅうを作ったり漬物を漬けたりして。一時帰宅で来たり、動物に餌をやりに来たりいろいろあるじゃないっそういう人たちが回るわけです、明かりがついているから。「いたのか」って寄って、まじゅうでコーヒーを飲みながら。

西山
あの場所があつて寄れるっていうのをすごく喜んでくれて。私たちが川内に来た人に「来て大丈夫なんだよ」という、そういう姿を見たら帰ってきたら帰ってきたり帰る人も、1人でも2人でもそういう姿を見たら帰ってきたり帰るかな、なんていう期待もあつて。

江川
家に戻りに通ってた人も寄ってくれてたところなんです。

いいことばっかじゃなかった

秋元
もちろんみんな帰ってこれたかどうかともわかんないし、それに、住民の人が役場の職員が一生懸命やっているのにもかわらず、いいこと言わない人もいます。だから、そういうことで川内村はだめになるなど。とにかく一つにまとまっていなきゃだめだということをやっていたんです。それが一番大きいことかな。いいことばっかりじゃないんです。「村の職員、何やってんだ」とかそういう人もいます。だから「だめだ。そんなこと言わせていらんねえ」と。言葉が悪いけど、ごめんね。

天野
いやいや。秋元会長は元々男気のある方だから。

西山
男っぱしい方なんです。

小林
かっこいい。

「よし、わかった」

天野
いやいや、本当だ。ちょっとだけ脇道にそれると、いろいろ困りごとがあつて会長に相談すると、こうやって腕組んで聞いているんだ。そして「よし、わかった」って言うんです。俺、あれはもう何回も聞いている。「よし、わかった」って。あのときのリーダーとしての力強さっていうのはないよね。

秋元
そんなことはないんですけど、そういう状況で。あとは、11月頃から国道399号が、川内からいわきに抜ける道路がすごい山道なんで広くしてもらおうということとで署名運動をして、3,000人分ぐらい集めました、「迎える会」の人たちで。

富岡のほうに行けなくなっちゃった

でも、いいことばっかじゃなかった。中には「なんで、おめえら、こんなとき、帰ってこ、帰ってこって言うんだ」なんて、そういう人もいました。

天野
それは村の人でもね。

秋元
うん。でも、私たちは無理にじゃなくて、帰れる人はっていうことで「こいさいるんだよって言うこと」で。

西山
中傷もありましたね。中には。

西山
「まだ帰村宣言もしていないのにそんなことやっていて」っていう、そういうこともありましたが。

小林
まだ複雑な。その年の9月ですもんね。

秋元
だからそういう当番をやりながら、じゃあ、月ごとに活動もしようということで、役場周辺に花を植えたり。役場と「ミユセン」に8ヶ町村の消防職員が寝泊まりして、そこから出勤していたので、両方に「戻れるよ」とか、「帰れるよ」とか、町村の名前を書いてエールなどを送ったり。清掃活動をしたり。あと、仙台の荒浜地区、あそこが津波でやられたっていうことで、「じゃあ、みんなで植樹祭に行こう」って。

江川
自分たちのことだけじゃなくて向こうにも。

秋元
そう。向こうにも。

天野
よその地区さも行ったの？

西山
私ら生活圏が富岡だったの。だけど富岡のほうに行けなくなっちゃったの。あちらが区域だったから。行くとパレードを張って行って行けなくて。行けるのは399号のいわきのほうしかなかった。でも、あの道とってもひどい道なの。もう本当ひどくて細くて。

小林
一回通りました。不安になりました。途中で。

西山
冬は通れないし。もうちょっと改良してほしいって。署名して、福島県庁に。

秋元
そのとき元の法務大臣、岩城光英先生と村長さんと商工会長さんも駆けつけてくれて、その場に一緒に。

西山
その後でトンネルづくりが始まったんです。認められて。

小林
形にしているのがすごい。

江川
迎える会は、女性が多いんですか。

秋元
そうですね。女性だけです。「男の人は」って聞かれるんだけど、男の人もいたんだけど、なんでだろう。

西山
姿が前に出なかったです。男の人は。家にばっかりこもっているっていうか。

江川
いざとなったときはあれですね。やっぱり女性が。

天野
非常時は多いんです。

江川
まず食から入れるっていうのが一つありますよね。温かいコーヒーを入れてあげようとか。

西山
あとやっぱり漬物ですか。お年寄りが多いから漬物を漬けて、お茶のとき、おまんじゅうとお漬物で。

秋元
まんじゅうも手作りです。まんじゅう作りの人もいたものですよ。

天野
川内はなんでも作るから。

秋元
そうそう。こういうテーブルに置く花も集めて。

野の花

西山
野の花。

秋元
あぜ道とかから採ってきて。

西山
トイレとかに飾ったり。トイレ掃除もしたんです。公共の2つあるんですけど。皆さんいろんな会議があつて来るから。きれいにしようっていうことで。

江川
そういうところに目が向くのは女性ならではだね。

天野
ここから富岡に入るときに、まだ制限されていた頃は、ち

そうだね。一般の住民がもっと気軽に参加できるお祭りならいいなと思って。

天野
子どもらも、アンケート取ると「心平先生」って挙げるもんね。「川内村に何がありますか」っていうコンテンツを聞く取り組みをやっているんです、ふるさと学校で。そして「心平先生」って挙げてきたのがやっぱり一定数います。

西山
毎年、子どもたちが詩を読むの、天山祭りのときに。それもあのかと思う。

天野
それは大きいですよ。

江川
いいですね、そういうふうには子どもたちが関わっていくというの。

西山
昔はそういうことはなかったけど、震災後かな、そういうのが毎年あるから、子どもたちも心平先生のことを知るようになってきました。

小林
子どもがそういうことをお祭りやると、それを見に大人も集まるんじゃないですか。普通の人たちも行きやすくなるっていいか。

秋元
おばあちゃんとかおじいちゃんとかが集まってきましたから。3・11の年の天山祭りのために賞をもらって東京に行ったときに、村長、副村長、議長、そういう人が行くわけだ。私も代表で行ったんだけど。肝心な商工会長さん、主催でやった人が行けなくて。向こうに行つて、贈呈の理由を目をつぶって聞いていると、「あの東日本大震災、原発事故によるにも関わらず、詩を尊ぶ精神を貫くことができた」という贈呈理由なの。私はよくみんな頑張ったなという思

ようどあそこのトイレで防護服に着替えて行っただけです。ここから30分ぐらいかな、富岡まで。あの道をまっすぐ行くと富岡なんです。だから、さっきおっしゃったみたいにバリケードが途中で張られていて。一時立ち入りが許されるようになってからは、あそこで防護服に着替えて富岡に入るっていうことをやっていたんです。みんな。靴もこうやって。

秋元
ここ1年ぐらいは障がい者の人たちがお金を少し稼ぎたいということ。補助金もそこそこになってきたんだ、多分。「やらせてください」ということでこと下川内のところと清掃をやるようになったんだけど、その前は婦人会だった。

江川
そこにちよつと花があるだけで気持ちが変わりますよね。

小林
しかも、造花じゃなくて。

西山
野の花で。

秋元
あれがやっぱり良かった。

小林
婦人会の方々は何名ぐらいで活動始めたんですか。

秋元
震災前は230人ぐらいのメンバーがいたんです。震災後は活動するのは大体30人ぐらいです。でも、天山祭りだけは50人ぐらい集まった。震災当時の天山祭りは30人ぐらい。

江川
今も天山祭りをやると、外に行ってしまった方たちも戻ってこられるみたいなきことあります。

天野
思いとすればそうだな。直接やっている人でなくて、ということでしょう。名札ついている人ばかり呼んで、い

江川
こうやって活動して年数が経ってきたわけですけども。今の川内に、どんなものが足りてきてどんなものが足りないって、そういうことありますか。

内に力を

秋元
そうですね。9年近くなると我々も復興を肌で感じながら生活していますから、当時のことをどんどん忘れちゃう。いろんなことを村ではやっていますよね。産業関係も工業団地を作つて業者を入れたり、福祉関係でも力を入れたり。今度小中学校でも始まります。そういうなかで、地域への思いやりがこれから必要だなって。だから、3月の総会で、天野先生にお願いして、地域のつながりに力を入れてもらいたいという話ができたらなと思ってます。支援をしてもらった人はいろんなことで整ってきていて、復元と復興の状況はできてきているので、今度は地域にそういうものが必要なのかな。内に力を入れなきゃならないのかなと思います。

途切れちゃうんじゃないかなって

西山
あとは私たちの年代もだんだん高齢になってきて、あと何年活動できるかわからないなという思いもあって、若いお母さんとかお父さんにこれからのことに関心を持ってもらいたいなというのが一番です。復興とかの勉強会があるんだけど、なかなか親は参加できないの。結局家におじいちゃん、おばあちゃんが出ていくとか、そんな人が多いので。公民館でやっている中央学級というのもあるんです。

秋元
震災のときはそんなに戻ってこなかった。やっぱり村がいなというところで「こんなときにできるのか」といろいろ意見があつたんだけど、観光協会が主催となって、迎える会が協賛となって、山菜料理を作つてやりました。

西山
あとはもう草野心平先生に関わりのある人たちです。

江川
「継続してやんないわけじゃないっていうことだ」って言うていました。

秋元
このときやったことで平成27年の11月に第53回藤村記念歴程賞という賞を川内村民がもらうことになった。

心平先生

小林
皆さんにとって心平先生は今どんな存在ですか。亡くなつて大分経ちますが。

秋元
本当に大した人だったなって。

西山
子どもの頃は全然わからなかったんだけど。あまり村民が行かないの。天山祭りにあんまり。詩人の人とか関係者が多くて、あとは婦人会とか郷土芸能で踊る人とか、そういう関係のある人は行くんだけど、あんまり一般の人って参加しなかったの。

秋元
村会議員さんとかが参加するんだけど、あれでちよつとおかしいんだ。やっぱりあれは自然と人が参加して、村会議員とかそういうのはいらんないんだ。

西山

けど、それも老人会と婦人会の人が主に参加するの。若い人はほとんど参加できない。屋間やるから仕方ないんですけど。だから、夜も何回かやるとかちよつと工夫して若い人たちに関心を持ってもらわないと、私らが終わっちゃうと途切れちゃうんじゃないかなって心配します。

秋元
それはあるよね。でも、川ニティでも報告会とかやっているんだけど、若い人って来ないんです。ちよつと難しいところがあるんです。子どものふるさと学校なのに、若い保護者が来れない。

小林
お仕事とかで、ですか？

秋元
いや、夜だから、話を聞きたければ来れるはずなんです。ちよつとだから、足りないところがそういうところにあるんだな。これからの課題だ。

天野
続けていかねばわかんねえな。やっぱり。続けていかねば。

秋元
よろしくお願いします。

小林
お二人には、富岡とか大熊、双葉、海のほうの町、村ってどういうふうに見えていらつしやいますか。

秋元
難しいですけども、でも、少しずつ帰りたい人は戻れて。大熊町の町長が今回辞めたでしょう。みんなから花束をもらっている姿をテレビで見ていると涙が流れた。よく頑張つたなって、本当に。大熊は大変だったですよ。町の一部が戻れたから終わろうと思つたんですよ。今度双葉も戻るようになる。だから、確かに若い人は住めないけど、ふるさとに戻れたっていう思いに対しては良かったなと思う。

西山 やつぱり高齢者は戻りたいですね。自分が長年住んでいたところだから。だけどその高齢者があと何年生きられるかわからない。その後、どうなるのかなというところが。

小林 ですよ。思いがある人がいなくなった後ですよ。

みんな核家族になっちゃって

西山 うん。今までだったら息子さんたちと一緒に住んでいたから、その家をまた守ってくれる人がいたんだけど、今はいないでもんね。みんな核家族になっちゃって別々に暮らしているから。戻ってくるのはおじいちゃん、おばあちゃんだけで。その高齢者が亡くなったら人数がどんどん減っちゃう。うちは6区という行政区なんですけど、80代の人がほとんどなんです。そこに若い人はいないんです。うちぐらいで。だから、だんだんあの部落はなくなっちゃうんじゃないかな。どこもそんな感じはあるんですけども。

秋元 どの町村もそれは課題だから。

天野 川内をよく言っているように、これから日本のあまねく地域がそういう課題を抱えるんです。だから、我々が今この課題に取り組むことによつて、それが他の地区の必ずモデルになるはずだから。みんな同じに困るんだから、絶対に。年寄りが多い、子どもはいない、若けえ人いねえって。そういう中でなじよするのっていうことへの答えを俺たちは見つけることをやっているわけだ。

西山 社会福祉協議会もそうです。民生委員で会議すると話がそればかりです。高齢者、どんどん増えるから、どうやって対応しようかって。私は主任児童委員だから子どもの関わりなんだけど、それはそつちのけでほとんど高齢者の話ばかり。

なんで若えのじゃなくてはだめなんだべ

天野 そのことに関して言うと、山形の川西の吉島地区に研修に行ったときに事務局長に4日間朝から晩まで張り付いたんです。ある地区で講演会があつて後ろで見ているらば、講演が終わった後の質問タイムで「うちの地区は70代とか80代しかないんだけど、若けえのがいねえから、これからどうしていったらいいんだべ」っていうその地区の人からの質問に対して、その吉島地区って面白い地区なんです、今説明しませんけど非常に特色のある地区で、その事務局長は「なんでリーダーが40代や50代でなければならぬんですか」って。「70代や80代しかないければ、70代や80代の村作り、地域づくりがあるはずだ。なんで若えのじゃなくてはだめなんだべ」という答えを聞いたときに、「なるほど、そうだな」って。

どうしてもまちづくり、村づくりの議論になると「後継者がいない。高齢化が進んでいる」って、判で押したみたいに同じような反応になつたら。なんで70、80でだめなんだよというところからもう一回問い直しが必要なかもしれない。

西山 だから、70になつても80になつても元気でいられる高齢者づくり。それをしなくちゃならないねって。

天野 かね子さん、言うとおりだ。そこだ。川ニテイの第2弾もそこです。第2弾は免許返納制度とそれを支えるリタイアした人たちのコラボレーションの事業が待っているんです。

西山 子どもからお年寄りまで。大熊さんは今度できる学校は0歳から100歳までを考えた学校づくり、そんなふうに出てました、新聞には。そういう感じでやればいいのか。お年寄りに0歳がついていれば、お年寄りも元気になるし。

江川

アパートは何にもなくて、テレビ見るだけですもんね。

秋元 震災後、大分弱った。震災前は「大根だ。白菜だ。豆だ」って。仕事さ行く前に、「それ、豆、早く採らないと大きくなつたら」って言われて、こつちのほうがストレスになつて。

金などねくたつて暮らしてがっちゃ

天野 俺は、郡山の富田の川内の仮設住宅で、見てとわかつたんだ。狭い部屋でこうサッシがあるでしょう。ここにこたつがあるでしょう。こたつがあつて、こつちに「升瓶だ。ここにコップだ。ここにテレビのリモコン。そして、朝から呑みながらチャンネルを変えて。便利だつて言つてた、みんな。「木綿のハンカチーフシンドローム」って言っているんだけど、俺。都会の味を覚えちゃつて。24時間スーパーは開いているし、病院だつてあまたあつて。ただけど、川内の人が、「郡山は便利だつたけど、金がねえと何もできねえ」って。「川内さいれば、金などねくたつて暮らしてがっちゃ」って。

西山 あと、水。水が一番大変だつて言っていました。川内はいくらか使つても水、ただでしょう。だけど、うちの娘は子ども4人で夫婦で家族6人いたの。川内に戻つてくる前、三重県から郡山に少しいたんです。そしたら、もう水がとにかく大変で。あとはお店がいっぱいあるからつて外食すると6人だとまた大変だし。「とにかくお金がかかつた」って言っていました。

川内に来たら買い物にもしょつちゆう行かない。食品はあるけど服とか靴は売っていないから、土日に郡山まで買い物に行つて。行くときも気晴らしにもなるんです。子どもも遊ばせたり。子どもが遊ぶところがなかったんです。川内、最初は。外で遊ばなかつたし、郡山のなんとかキッズとかつて、そういうところで遊ばせたりして、気晴らしには行っていたんだけど。十分楽しんでいたんだけど、「郡山にいるよりはちよつとお金は節約できるな」なんて言っていました。

学校という仕組みにコミュニティの場所づくり、居場所づくりがあると世代の交流ができるかなとは思いますが。

コミュニティ・スクール

西山 だから今、コミュニティ・スクールは学校に住民が出入りできるような、そういうつくりになっているの。

江川 そうなんです。地域の力を学校の力にしている。子どもたちを育てる力にしている。っていうのがコミュニティ・スクールなので、それに取り組むっていうのは県内でも早いほうだと思います。

小林 学校が閉じて隔離じゃなくつて、開いて地域とつながる。

江川 誰しもが行つて、そこで教えたり、教わつたりということができるように。

西山 今までは学校つてやつぱり敷居が高かつたですよ。授業参観ぐらいしか行けなかつたから。でも、今度はお茶飲むコーナーも作ると言っていますので、気軽に行けるのかな、なんて楽しみにしています。

震災後いろいろ変わったよね

秋元 震災後いろいろ変わったよね。

天野 変わるねえとなんねえな、やつぱ。

小林 そうですよ。あれだけのことが起きて、大変な思いもされて。

小林 お金で買わなくても、買えない何か川内にはきつとあるんですよ。お金で買えないものが。

天野 消費文化じゃないんだ。

西山 野菜を作っているし、隣からおすそ分けしてもらえりし、そういうのが助かりますね。お米もすぐ作れるようになったし。川内のお米はおいしいから。

支え合いの文化

天野 米うまいね。元々支え合いの文化があつたのが、避難によつて消費文化の中に放り込まれたわけです。便利だつて思つただけど、多くの人たちは。確かに便利だ、病院もいっぱいある、スーパーは24時間やっている。コンビニもたくさんある。けども。

江川 お金がかかつちゃつ。

天野 そう。消費文化なわけです。もう一度川内のことを思い出すと、支え合いの文化だつた。

暮らして。味が無い。

秋元 消費文化は、味が無い。暮らして。味が無い。

西山 子どもたちも最初は避難して便利などころに行つて、「川内はコンビニないし」なんて言っていたんだけど、住んでいるとあんまりそんな不満も言わなくなつて、1ヶ月に2回ぐらい買い物に行くぐらいで満足しているみたい。聞いて

みたんです。「郡山行って便利だったけど、川内とどっちがいいの？」って言ったたら、「僕は川内のほうがいい」って。

江川
何年生ですか。

西山
6年生。震災当時は4歳だったんです。避難しているときは3歳と4歳で。

江川
記憶にしっかりあって。

西山
あります。友だちも誰もいないし。でも、あちらに子どもたちを集めてくれるところがあって、そこでちょっと遊んできたらしい。随分親切にしていたんだ。

江川
その子は川内の何がいうて言うんですか。

やっぱり自然

西山
やっぱり自然。

天野
子どもは自然って。ふるさと学校のアンケートでも第1位は自然。

西山
避難してる時は周りに緑とか山もないし、落ち着かなかったのかな。「僕は川内がいいんだ」って言うていました。

天野
一方で「川内にあるといいものはなんですか」という問いには、みんな大体予測してると思いますが、スタバにマクドナルドにケンタッキー。中央資本の。それがあることが子どもたちの価値の中では豊かだと思ってるんです。

でも、大人たちに聞いてみると違うことを言うんです。真逆のことを。パラダイムシフト、その価値をどう転換させることができるんだらうというのがふるさと学校の一つの大きな眼目。秋元通さんという里山を持っていて、その里山を活用した暮らしをやっていらっしやる方がいて、通さんのお宅で今年のふるさと学校をやる予定なんです。

西山
そこだと山遊びができるの。だから楽しみにしているんです。うちの孫たちが。

小林
さっきの「川内が好き」という言葉がぐっと来ますね。

天野
会長の「生活に味がねえ」という、その「味」というのが他人事ではないんですよ。

